

## 第1部 講演(2)

山田 引き続き、2人目の発表に入らせていただきたいと思います。国立社会保障・人口問題研究所の国際関係部長、林玲子部長に、中東・アフリカの人口と開発という問題についてお話をいただきたいと思います。林部長は、JICAのセネガルの保健省のアドバイザーをなさったと伺っております。また最近、国連人口開発委員会の日本代表でニューヨークでの会議に出られたということもあって、中東とアフリカの話が中心となりつつも、人口と開発という問題と、それからSDGsとの関係についても発表の中で触れていただくことになろうかと思っております。では、林先生、よろしくお願いいたします。

### 林玲子氏<国立社会保障・人口問題研究所 国際関係部長>

ご紹介にあずかりました、林玲子と申します。国立社会保障・人口問題研究所は2012年4月から働いておりますけれども、その前は今言っていたように、JICAの専門家で3年ほど、2008年から2011年までセネガルの保健省大臣官房技術顧問という形でJICAの専門家で行ってまいりました。

セネガルは望月さんも2回いらっしやったってことでしたけれども、私も2回ほど長期で行ってまして、最初は2002年、2003年に。それで私が最初にいた2002年にセネガルではセンサスをやっていたんだけど、なぜか私の所には聞きに来なくて、望月さんはナイジェリアのセンサスに入っていたらっしゃるってことですが、私は入っていないということになっています。

それで、2012年に国立社会保障・人口問題研究所に来まして、すぐ後に国連人口開発委員会があったので、参加しました。毎年行っているんですが、そこに行ったその年のテーマがユース、青年ということで、やはり潘基文国連事務総長がすごく青年ユースに力を入れたいということで、国連人口開発委員会は長年やっているんですが、国連事務総長が初めて来たということを知りましたので、やはりすごく今まさに若者を取り上げてやっていこうという、いろんな強い流れがあるんだろうなというふうに思っています。

私自身は、雇用のほうはあまり専門ではございませんで、保健、人口、あと都市問題とか、そういうことが多いんですが、きょうは人口全般に、特に明日が世界人口デーということになっておりますので、それも記念しながらということで話していきたいと思っております。

(s2) それで、ざっくりと世界の人口ということで、これが1950年から2100年までは国連が各国ごとに推計値を出してくれますので、ウェブからフリーでダウンロードもできますので、ぜひ皆さんもダウンロードしてみたらどうかと思うんですが、これは年齢3区分で見たときに、もう世界全体で見ても0から14歳の青年の前というか、子どもというか、そこはもう人口が伸びない。今からどんどん増えていくのは、65歳以上の高齢者であるし、それから2000年から2050年までに限れば15歳から64歳の働き盛りがやはり伸びていくと。この紫の線は人口増加率、年率で表して、この右軸になるんですけれども、この辺り、やはり1960年代、1970年代は非常に高く、それで人口爆発だといわれ、家族計画は重要だということになって、人口問題が世界的な、まさに地球規模課題ということでUNFPAもつくられましたし、いろんな活動が行

われて、その後、人口増加率はどんどん下がってきています。従って、そういう意味で、70年代にみんなが頑張って人口を減らそうといった試みは、成功したというふうに言えるんだと思います。

(s3) それから地域別に世界の人口、同じように1950年から2100年まで見ますと、もうとにかくアフリカがどんどん増えていっている。今回はアフリカと中東ということですので、西アジアも含め、お話しします。

(s4) 人口学では出生、死亡、移動に分けてみますので、一応最初に出生の動向をざくっと言うと、合計出生率、1人の女性が平均して産む子どもの数という定義ですけれども、これも世界全体で青色で下がっています。すごい勢いで。アフリカだけ飛び抜けて高いけれども、下がっている。もう一つ、西アジアも下がっているけれども、やはりアフリカに次いで高いということになっています。(s5) それから死亡は、平均寿命で見ることが人口構造の影響を受けないのでということで平均寿命で見ることが多いですが、平均寿命を見ると、世界全体でもぐんぐん上がっていて、アフリカが一番低いけれども上がっていますが、1990年代にエイズの影響がこういったマクロの数字までにも表れていて、ここで平均寿命の増加が止まってしまっている。けれども、2000年を越えてから、また上がり始めています。西アジアは、ここに大きくすごい勢いで伸びているというのが分かります。この東アジアのここは中国の大躍進とか、そういったときに死亡率が上がり、寿命は縮んでいるんですけれども、その後は急激に上がっているということになっています。

(s6) 人口問題といわれますのが、先ほどもちょっと話したんですけれども、そもそも経済学とか、歴史学とか、医学とか、そういったものは古来2000年、3000年の歴史があるんですけれども、人口といいますと、人口と特に西洋社会で言い出したのが18世紀の半ばぐらいからで、それでデモグラフィという言葉、日本語で人口学と訳される言葉ですが、もともとの英語が使われたのは1855年という、新しい学問と言えれば新しい分野でありました。それで中国では戸口とか、民口という言葉で漢の時代、もう2000年前から戸籍とかがあったんですが、それでも人口という言葉が使われ出したのは日本がデモグラフィという言葉で翻訳して人口として、それを中国も使ったということになっていて、新しい学問と言えれば新しい学問だということになっています。

それで最初、国際連合の前の国際連盟ができて、やはり世界の人口が幾らぐらいかをきちんと数えて把握しなければいけないねということで、20世紀の最初ぐらいに世界人口がどのぐらいかという統計を集めたり、国際共同研究がされ始めまして、そこでまた人口統計も世界規模で整理されてきました。先ほど望月先生におっしゃっていただいた、センサスも早いところはスウェーデンで18世紀からやってたんですが、世界全域に広げてやろうというのはやはり19世紀の終わり、20世に入ってからということになります。それから1920年代、1930年代に植民地の統治があって、そうしたときにイギリスやフランスがアフリカ、アジアにも統計の制度、センサスなどを入れていったという流れがあります。

戦後に世界人権条約、国連ができて、人権というアプローチが大きくなってきたことと、冷戦があり、それでその冷戦の中でいかにそれぞれの第三国を取ってくるかという、そうした

中で援助という流れもある意味で続いていた。そうした中で、人口の爆発問題、1960年代のあの高い人口増加率を見て、人口を抑えなければいけないということが出てきて、これが大きな地球規模の課題になりました。1994年にカイロ国際人口開発会議、ICPD というものが開かれたんですが、その時点にはかなり人口増加率がもう既に下がっていて、その人口爆発問題は終わりそうだから、今度は転換してマクロに人口を抑えようということよりも、女性個人がいかにかいいお産をできるか、いかに自分の望みをかなえられるような形で人生を送れるかというふうに、マクロからミクロへと視点の変換。そして、人間開発といった新たな視点が入ってきて、人口問題というのでも若干姿を変えてくるという、そうした流れがあり、人口問題と一口で言っても、時代によって変わりますし、最近になると、人口問題って何なんですか？という、もういろんな分野があり過ぎて、結局なんだかよく分かんなくなってしまうとも言ってもいい状態にもなっています。

(s7) これが、2014年のときに撮った写真ですけども、毎年4月ぐらいにニューヨークの国連本部で国連人口開発委員会というものが行われています。(s8) 1994年にカイロ国際人口会議がありまして、それから毎年行われている人口開発委員会のテーマを一覧にしたんですが、この赤い所が Reproductive Health and Rights、ジェンダー関係、黄色い所が政策関係ですね。それから青い所が、Health and mortality だとか、morbidity だとか、そうした HIV エイズ、保健関係のテーマ。緑の所が、国際人口移動や国内人口移動。そうしたテーマが、この人口問題、人口開発という中にこれまで含まれてきました。

結局、こうしたいろいろなテーマが取り上げられていて、1994年にカイロ会議で作られた国際人口開発行動計画を20年後にレビューしようと言った、そのレビューが去年行われました。それで今年の人口開発委員会はその人口問題をいかに持続可能な開発に取り入れるのかということで、いわばそれまで人口開発、それから北京女性会議でやった女性とジェンダー、それからリオでやった環境開発会議、いろんな国際会議があったわけですが、それらをリオ環境会議をメインにして統合して、これからやっていこうという流れが見て取れるようになってきています。

それで、先ほど人口問題というのが国連で議論されるときにちょっと見えにくくなっていると言ったんですけども、これは議論をしていて必ず今けんけんがくがくになって、もう議論が収まらない、2014年のときは最後の日の会議が夜通し続いて、終わったのが朝の9時だったと。途中でもう会議が中断されて、密室の会議でこのグループと議長が、このグループと議長がというふうに話し出して本当にまとまりませんでした。それで今年の4月はもうそういったことはしない、だから、議長が妥協案の決議文書を出したのですが、反対が出たために決議文書自体を採択しないこととして、この国連人口開発委員会が終わってしまったという結末になっています。

(s9) どういったことで議論されているかという、まずは三つの点、Sexual and Reproductive Health and Rights、この言葉を使つてはいけないと反対するメインの国がアフリカおよび中近東、アラブ諸国、プラスロシアなどなんですが、これが何が問題かという、こうすると Sexual Rights がある。つまり、同性愛、性的嗜好の権利というものを認めるかどうかというところ

で、まだやはり合意点が見いだされていないということ。それから Safe Abortion という言葉、これは結局使われていたりするんですけども、これも Abortion というもの、中絶というものに Safe なものはない。これは絶対いけない、というのが、イスラーム諸国、イスラーム諸国もそうですけれども、ホーリー・シー、カトリックの法王、バチカンも参加して常に皆さんにお説教というか、皆さんに訴えるということをしています。それから Comprehensive Sexual Education といって、包括的な性教育ということも重要だということがいわれているんですが、これはやはり年齢に応じた性教育にしなければいけないということで、アラブ、アフリカ諸国が反対している。この三つの点で、かなり価値観に関する分野で延々と 20 年間議論がされていたものも、最終的に合意に至らなかった。ということは、非常に強いメッセージかなど。今まで人権とデモクラシーということで西側諸国といいますか、欧米諸国が発展途上の国々を引っ張ってこうとしていたけれども、それがやはり価値観というところでうまく一致できないという状況、やはりそれがだんだん見えてきたという状態だと思います。この価値観の点をもっときちんと考えて、場合によっては、価値観ですので、合意を見いだすことというのは無理かもしれないけれども、同じテーブルに着いてそうしたことを話していくということが、これからはますます必要になるんだろうなという状況です。

あとは、パレスチナ問題と Common But Differentiated Responsibilities という問題があるのですが、後者のほうは、常に国連の場では、途上国はお金がないので、先進国がお金を払うべきだ、先進国はもっとたくさん払うということで責任を果たすべきだという議論がありまして、日本は各国平等自立の観点から常にそれは反対しているんですけども、そこで常に議論がある。こうしたことも、人口開発の分野でもそうした問題点が常に取り上げられ、常に議論され、常に決着しない、そういったことが今も続いています。

(s10) それで今後、今年 9 月にポスト 2015 開発アジェンダが多分 SDGs ということでオフィシャルにローンチされて以降 SDGs という言葉をみんなが使い始めるのかなとも思うんですけども、一応今のところ、提案されている目標が 17 個あります。これまで MDGs のときは HIV エイズや結核、マラリア、それから妊産婦死亡率、健康、つまり Health に非常に重点が置かれていたけれども、SDGs になって今度はより広い分野も対象にしよう、特に持続可能なという、リオの環境サミットからを中心にまとめられていることもあり、気候変動や、海洋システム、それから自然関係のところも数多く取り入れられていますけれども、ピースというところも入っているし、それから justice や institutions と書いてあるのは、ガバナンスをどうやってやるかとか、そういったこともかなり多く取り入れられています。

(s11) それで実は人口というものも、Population Dynamics、人口変動ということで、この SDGs の中にその言葉を入れようかという動きもあったんですが、結局そういったターゲットとしては入りませんでした。入らなかったから残念というのではなく、人口っていうものは目的にはいけない。全てのいろんな目的とすることのベースとなるし、それをきちんと把握しなければいけないけれども、人口の何とか率を何々パーセントにしましょうというようなことはやってはいけないという合意が、逆に今回できたのではないかなという、それは、いいことだったと思います。

ただし、この分野のほとんどの分野にも、人口は関係してきている。一つ、このエコシステムだとか、Goal 15 の自然とか、生物の多様性とか、そういうところと人口はあまり関係ないかと思ったりすることもあるんですが、それもこれから、例えば日本だと人口が減少していったら、逆に村から熊が出てきた、あと鹿が出てきた、イノシシが出てきた、そういったことで人口がどんどんこれから減るか、増えるのが止まると、そこで新たな動物、植物とのバランスをどうやって考えてくるかというのも新しい視点が出るのではないかなということが、いわれたりしています。そこまで入れるかどうかですけれども、人口はこれらのベースにあるものということで、全てが対象になると言えばそうなるのかもしれませんが。

きょうはその全てが対象になるけれども、一応人口と関わりがあるという項目を選んでお話をしようと思っていました。まずは若者と雇用、望月さんにもうかなり話していただきましたけれども、それから人口の高齢化と健康、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ、それから移動と開発について。都市化は世界でもう都市人口はどんどん増えていくということもあり、スラム化など問題になっていますけれども、あと国内の人口移動、それから国際人口移動、いろんな切り口があります。あとは、先ほどガバナンスという、institution という形で新たに SDGs に入ってますが、このデータをどういうふうにとっていくか、その中でも出生や死亡の登録というものをいかに 100% するかということも目標に掲げられています。非常に重要なことですので、この点は挙げたいと思います。それから SDGs を超えてと書きましたが、宗教と人口ということも少々お話ししたいと思います。

宗教と人口、価値観ということで、先ほどの Sexual Rights だとか、ジェンダーについても関係しますし、特に今回アフリカと中近東ということではやはり実は避けては通れない課題だけれども、こうした SDGs は必ず触れられないという点が宗教。なかなか触れることができないのが、この点だと思います。(s12) 中東、アフリカ地域での人口ですので、ガッとマクロな手法をいっぱい出しちゃうんですけども、一応統計的にはアフリカと見るときにアフリカ全域が出てくるけれども、つながりとしては中近東、この部分、ここが西アジアで、ここが北アフリカという、これを一つに取りまとめたほうが、トレンドが似ていてよく分かりやすい。そして、この赤い所が、サブサハラアフリカということになります。それで一つ、ここにスーダンという大きなのがあって、今はスーダンと南スーダンに分かれていて、国連統計的にはスーダンは北アフリカ、南スーダンはサブサハラアフリカに入っているんですが、ちょっとここではきれいになるから、スーダンもサブサハラとしています。(s13) こうした地域を見ていくとどうということが分かるかということなんですが、まず今後、先ほど世界全体の 2100 年までの人口というのを出しましたが、2050 年まで区切って、2050 年人口を 2010 年人口で割ったという、これは比率になりますけれども、これを見ると、全部の年齢層ですと世界はまだ 1.38 伸びるんですが、もうアフリカが断トツに 2 倍、この 40 年間に 2.3 倍になるということになり、アフリカはもう全ての年齢層で大きく増えます。一つここで、15~64 歳、働き盛りの人口も世界一増えるんですが、注目したいのはこの 65 歳以上、高齢者の人口も実は 4 倍になるという。この増え方は、やはり世界随一。それよりも高いのは、西アジア、いわゆるアラブ諸国、イラン、トルコ、それら国が一番高齢者の数が増えるんですけども、それに次いでアフリカも増えると

ということになっています。西アジアは、15～64 歳もアフリカに次いで、これから伸びしろがあるということになっています。

ですので、今、人口ボーナスをどう生かすかというのがもう大きなテーマになっていて、それが本当に生かせるかどうかは、こうした働き盛りの増える人口をいかに雇用を生んで吸収していくかというところなんですけど、なかなか難しいところもあるかもしれません。

ちなみに、人口ボーナスなんですけれども、日本も 1960 年代、1970 年代に人口ボーナスがということは若干後で言われたということがあって、人口ボーナスが本当に経済成長に関係あるのかというのは 1990 年代にドラゴンのアジアの新興国についてブルームさんという方が言い始めていて、いまだ本当にそうなのかというのは経済学者の間では議論があるところだとは思いますが、やはり今の特にアフリカの大きなスローガンとしては、いかに人口が増えるということを負ではなくて、ポジティブに捉えようということで、人口ボーナスというのが大きなキーワードになっているという状況になっています。

(s14) ポジティブと言った後でなんですけど、これが国別の失業率というところで、これは世銀のデータです。だから、先ほどの話みたいに、どこまで本当なのかという話もありますが、これを見ると、もう本当に南ア 25%、スーダン 15%、モーリタニア 31%と、日本では考えられないような失業率が平気で起きていて、さらに若者になると大変なことになっていて、これに対する政策はどのようにするかというのはまた大きな課題になるだろうなと思います。

それで、本当に正しいかどうかとは言われましたが、センサスというのは、国民全体を対象にしていて、一応お金を掛けて各国の統計局が行っていて、しかもそのデータは IPUMS という、ミネソタ大学人口センターという所で世界の人口センサスのマイクロデータを集めて、それを研究者に公表するという。ここの下にちょっと IPUMS International と書いてあるんですけど、そこでダウンロードをしてかなり自由に使うことができます。(s15) それから取ってきた、これは労働力別人口、男性の場合ですけども、モロッコを選んだのはモロッコが一番長い期間でデータがあったからですが、たまたまモロッコ、アラブの国、アラブの春が起こりそうでモロッコはあまり起こらなかったんですけど、アラブの国の一つとして引っ張ってきました。これを見ると、緑の所が年齢別の働いている人の数、青い所が失業者、この赤い所がそもそも就業しようと思っていない人とか、学生だったり、奥さんだったり、そういったことです。これは男性ですので、ほとんど若い人がピンクになっていますけれども、1982 年はこうでした。それでこれは同じスケールなんですけど、2004 年になると、人口が特に若い所で多くなって就業者も増えてますけれども、特に 15 歳から 24 歳までの所を見ると、失業者が特にこれ、20 代から 34 歳ですね。これ、13 万人だった失業者が 20 歳から 24 歳、28 万人と、倍になっている。なので、これだけ見ても、非常に若いところで失業が増えているというのが分かるんですけど、さらにこれを労働力生命表というか、労働力に応じて割り振ったというので見てますと、(s16) やはり非常にここに失業者が倍増しているんですけど、高齢者のほうでもここ、55 歳とか、そのぐらいでもある程度失業が出てきている。つまり、先ほどのこれですと、人口そのまま居るのですから、もともとこの若干高い年齢層の人たちは少なかったんで、あまり目立たないですが、今人々がだんだん死ななくなると、そうすると、その死亡率を考えて人口構造の影響を除くと、やは

りちょっと高年齢でも失業が起こっているし、しかもだんだん人々が死ななくなったことで若者の職というものも圧迫しているという可能性もないわけではないかもしれないなという。これは、大きな人口構造的な問題だということが言えると思います。

(s17) これは女性の場合ですけれども、これはそのまま生の人口データですが、女性が非常に働き出している。そして、失業も増えているということが分かると思います。ただし、やはり結婚して奥さんになって働かないという女性もかなり多い。これはアジアの、例えばベトナムとかと比べると、かなり違うのではないかなと。この辺りも一つ、中東、アフリカの特徴なのかもしれないなというふうに思っています。(s18) これは同じように労働力生命表で見た場合ですけれども、働く人も増えるし、失業者の女性も増えていく。女性の雇用はこれからどうやっていくかというの、ハードル高いと思いますが、あると思います。

(s18) これも長い期間取れることからセネガルを選びましたが、セネガルに行ったということもありますが、この期間で見ますと、実はモロッコと比べてあまり変わっていない。なので、モロッコの場合は、すごい勢いで死亡率が下がっていったので、その影響が労働力にもということもあるかもしれないんだけど、セネガルの場合は期間も短いですが、やはりあまり変わらない。(s20) これが女性ですね。女性の雇用は増えてます。これはちょうどアラブの春が起こった2011年のときに私セネガルにおりまして、それでセネガル人の労働組合の人だったんですけど、「アラブの国々はあんな革命だとか、勝手なことをやっているけれども、僕たちは守らなければいけない、扶養しなきゃいけない弟や子どもが居るから、そんなことは言ってもらえないんだ」ということを言っていたのが非常に印象的で、やはり非常にまだ高い出生率が続いている所だと革命になかなか行かないのかなというふうにも思ったんですが、子どもの数が減るかどうかということも一つあるんだろうけれども、あるところでまだサブサハラアフリカはそこまで就職する若者が困るぐらい年寄りが増えていない、昔のようにまだまだ年寄りが死んでいる。なので、死亡率の構造が、あまりまだ変わってないのかもしれないなと。だから、それがこれからどんどん死亡率が低くなって寿命がアフリカでも上がってくると、だんだん同じような革命というのが起こる可能性も十分にあるんだろうなというふうに思います。

(s21) 従属人口指数ということで、これはよく言う、0~14歳と65歳以上の人口を15~64歳で割った、これが高ければ高いほど養わなければいけない割合が大きいので大変だということですが、50年代ぐらいはこれが上がっています。これは子どもの数が増えている。それが世界全体が急激に下がって、今ちょうどわれわれはこの世界全体に見ても底ぐらいなんです、世界の多くの地域で高齢化が進んで、これがどんどん上がっていきます。サブサハラアフリカだけは別で、一番下がるのがまだまだ先ということになっています。ですので、サブサハラアフリカを除く全域で人口高齢化はどんどん進んでいく。(s22) しかし、先ほどもお話ししましたように、数だけを見るとアフリカの人口自体がすごく増えていくので、高齢者人口もどんどん増えていくという推計になっていて、これは2010年を100とした場合、2030年に200になるんですが、その数の増え方として見ると、東アジアやラテンアメリカとアフリカの増え方は同じぐらいになっている。増えれば増えるほど、慢性疾患のための医療ケアも必要になるし、年金制度も必要になるだろうし、いろんなことを整備しなければいけないという、大きな

ニーズを抱えるということになります。さらに2100年まで見ますと、この65歳以上の人口数がもう飛び抜けて、これは推計ですので正しいかどうかと言う前に、そのまま推計するとうなるんだということですが、もうどこかで破綻しないか、大丈夫かと、本当に真剣に取り組まない大変なことになると思います。

(s24) 高齢化の話は今後やることがいっぱいあるんですが、実はアフリカは家族制度もあり、もともと敬老の文化というものがあるという例で一つ、これは長崎大学の増田研先生の所でエチオピアの南オモ県バンナ郡ボリ村という所に入られて調査をされているんですが、これは何かというと、結婚式かお葬式の後に村の男性が1列になって、こっちから牛の丸焼きをだんだん順番に取って食べていくというのですが、これは年功序列に並んでいるということで、皆さん何歳かと聞いたりすると数が出てこなかったりするんだけど、彼は僕よりも年上で、彼は僕よりも年下という、そういう順序はもう驚くほどきちんと把握されているという話でして、こうした社会の制度というか、文化の中で、今後どういった高齢社会を築いていくのかというのは大きなチャレンジですし、あとはアフリカの家族は60歳以上の独居老人というか、高齢者だけで住んでいる家族の割合も非常に少ないし、そういう家族も敬老の精神もあるというふうにいわれていたんですが、「最近、そんな家族のそういった文化というのは若い人はどんどん捨ててきているんです。もうそれは全くアジアと同じ状況です」ということをおっしゃる方もいらっしゃいます。

(s30) 次に、国際人口移動。国際人口移動については世界でもどんどん増えていますが、ただ、総人口に対する国際人口の割合はそんなに増えていないということです。(s32) それで、一つアフリカについて非常に大きな点は、アフリカは語圏で大きくフランス語圏と英語圏と、それから少々の国がポルトガル語圏になっていますが、それに応じて非常に動き方が違う。英語圏の人たちは英語の国、オーストラリアに行ったり、イギリスに行ったり、アメリカに行ったり、そうした所に大きな流れがあるんですが、フランス語圏の場合は言葉の壁があるということもあり、フランス語をしゃべる地域に多く行くという、そうした国際移動の大きな流れがあります。ですので、よく英語圏ですと、特に医療従事者なんかはブレイン・ドレイン、例えばガーナの看護師さん、看護師さんで養成されてもどんどん居なくなってしまう。皆さんイギリスに行ったり、しばらく居た後でホップ・ステップ・ジャンプでアメリカに行ったりしてそのまま、ということで、それが大きな問題になるんですが、フランス語圏だとあまりブレイン・ドレインの割合がやはり低いようです。比較の精度とか、そういったこともあるんですが、そうしたことも非常に国際人口移動という点で影響を受けてくる点だと思います。

それから、国際人口移動が実は援助の額よりも移民による仕送りのほうが多くなったというのが、2000年ぐらいに世銀の報告でいわれまして、国際人口移動を活発化させるほうが開発に役立つんじゃないか、そういった議論があります。だから、国際人口移動をSDGsの中に入れてようじゃないかという動きもあったんですが、それは受け入れ国の反対などもあり、取り入れられませんでした。それは、今ヨーロッパ、地中海を越えた人々の流れなんかもあり、外国人排斥運動も強くなっているということもありますが、もう一つは世界的に人口高齢化が進んできているので、これまでのようにもう無尽蔵の労働人口が世界に有り余っているわけでもなくなっ



てきたということが一つあると思います。(s33) これは、特に移動しやすい15歳から29歳の人口を2010年を100として見たときに、もうほとんどそんなに伸びないんですね。一つ増えているのは、もうアフリカだけはガッと伸びるんですが、それでは世界の人口が減っていく欧米や日本などが、アフリカ人どうぞ、ということになるかということ、それは非常にクエスチョンであり、そういったことでも移民の争奪戦、特にハイスキル人材の争奪戦というのは起こっていますし、これからも多分管理された国際人口移動ということになっていくと思います。

難民の話もありますが、(s36) あとは国内人口移動のほうですが、量的に言うと、もう圧倒的に国内で移動している数が世界的に多いです。しかも、これは世界でいろんな移動の統計の取り方がありますが、それを日本のデータに当てはめて、それで移動性向指標と一つの比較可能な数値を計算して各国別に見た場合、1人当たりGNIが高い国ほど国内でよく動いているという相関があります。一方アフリカの場合は、国際的に動くだとか、都市に人が集まるということがありながら、地方、田舎のほうを中心に見てみると、田舎から全然動いたことがないという人がもう50%居たり、80%居たり、非常に動かない。なので、動けないから動かないというのがありますが、いかに国内で雇用をつくっていくか、国際的に先進国が人を引っ張っていく前に、国内の雇用をつくって、それでより近場に動いていけるような環境をつくるということが非常に重要だと思います。

(s37) それから、都市人口と農村人口。都市人口をここで紫に示してありますが、もう既に中近東ですと1980年ぐらいに農村人口を抜いています。この割合を抜くときにサブサハラアフリカはまだまだ先ということですが、農村人口も増えているということもあります。

(s41) データについて、最後の一つ前ですけども、この地図はセンサスを最後にやった年で、遅い所ほど赤く、やってる所ほど緑色にしています。一目瞭然のように、やっていない所は国情が悪い所ですので、ナイジェリアのデータが正しくないかもしれないけれども、やはりやっているということはもう大したもの、やっていない国、コンゴ民、アンゴラ。アンゴラは今年やったか、去年やるか、そろそろやるんですけども、ソマリアはもちろんセンサスなんてできる状態ではない。それからモーリタニアやコートジボワール、マダガスカル、そういった国でクーデターなんかが起こるような気配になるとセンサスができなくなる。そうしたことのよう、ガバナンスと人口統計は大きくつながっているということが分かると思います。

出生登録は出生登録をすることで子どもが医療を受けられるようになる、予防接種できるようになる。それから、学校に行けるようになるということで、ちょっと前から取り組みが始まっていて、死亡登録よりもより高いカバレッジですが、(s42) 死亡登録はまだまだ非常に低いです。例えば妊産婦死亡率というのがMDGsの大きな目標の一つだったんですが、それも結局死亡が登録されていないので、間接的な推計によるということで値が倍、半分ぐらい、推計する人によって変わってしまう。そうしたことで、やはり究極的な話はもう世界全ての出生と死亡が登録されることが非常に重要であり、それがSDGsの中にも盛り込まれていますので、それがちゃんと9月に決まれば非常に良いことだと思います。

セネガルでいろんなことをやっているということがありまして、(s54) 本当の最後に宗教の話なんです、世界の宗教別人口というのをやってる人が居まして、Christian Databaseなの

で、ちょっとキリスト教徒の割合が高めに出るんですが、この中で2014年の所が今なんですが、やはりキリスト教徒のほうがイスラム教徒よりも大きくなって、2025年もその傾向は変わらないということなんですが、一番驚くのは、この無神論者という人たちが非常に減ってきて、あと無宗教者というのが2000年ぐらいから少しずつですけれども減ってきてるんですね。それで、これなぜだろうと思うんですが、多分1970年代ぐらいからヒッピーなどが出てきて、無神論や無宗教、そうした人たちが増えたけれども、結局その人たちの出生率は低くて、それでだんだんもう自然にもしかして減ってきているのではないだろうか。これ、きちんと調べないといけませんけれども、そういったことで、日本でもそうですし、アジアでもそうですし、アメリカでもどこでも2000年まで下がっていた出生率がその後また上がっていくという動向が若干上がっているというのが見られていて、それはこうした無神論とか、そうしたものよりも、やはり伝統的な宗教とか、伝統的な価値観というのが世界全体的にやはりちょっと戻ってきているのかな、それとも、ある所でわっと合理的なものを求めていったところまで行き着くところまでいったので、もうそのまま続いていかないのかなということがもしかしてあるのかもしれないというふうに思います。

(s57) アフリカ、中近東については、宗教心、これはワールド・バリュー・サーベイというのがありまして、世界各国聞いているんですが、もう宗教が重要だという人が圧倒的に多いというのが特に特徴だと思います。日本はもう一番宗教心がない所ですけれども。(s58) あとはサブサハラアフリカについて見ますと、ここがイスラム、南がクリスチャンということで大きく分かれます。ここのこの線は何かというと、ツエツエバエ、眠り病のラインと一緒にしているということをよく言うんですが、アラブがこちらにおりまして、それで11世紀に馬に乗って南にやってきた。馬が行ける所まで行ったけれども、ツエツエバエで馬が刺されて馬が病気になるって死んでしまうんです。それから下には行けないので、イスラムの分布はここまですなりました、という説明がされることもありまして、実際よく合っているんで、本当にそうだろうかと思うんですが、その後でヨーロッパ人がキリスト教を持って船で海岸からやってきたので、キリスト教が海岸から広がっていった。ここで一つ、先ほどのナイジェリアがありますけれども、ナイジェリアがちょうどこの北がイスラム、南がキリスト教というのできれいに分かれます。(s72) いろいろあるんですが、ナイジェリアがこういうふうになっています。それで、全く予防接種を受けていない子どもの割合が、北は非常に高く、南は少なくなっていて、これを各州別の宗教の割合と比べると、非常に高い相関が出るということになります。

しかし、これは宗教がそういうことをもたらしているのではなくて、教育の水準が非常に低くなっている。特に女性の。その教育が低いことによって、いろんな人口指標なり、予防接種の指標はこれなんですけれども、もしも教育を受けてない女性が居なかったとしたらというのでコントロールすると、全く相関関係はなくなってしまうということですので、逆に宗教ではなくて、宗教によって違いをもたらしたナイジェリアの国の中の事情というものが、逆に国内の格差をつくっていて、それによっていろんなデータの違いか出てきて、それによって国内の不満もあり、ボゴハラムも出てきて、という話だと思います。ですので、宗教とは関わりなく、イランやインドネシアのように成功している国を見ながら、宗教を通していろんなインターベ

ンションをやっていくという可能性が大いにあると思っています。

(s73) 最後に、セネガルにアフリカのルネサンスの像というのが立てられて、前の大統領のウッド大統領が勝手に立ててすごいお金を自分の懐に入れて北朝鮮の労働者につくってもらったといわれて非難されているんですが、このお父さんとお母さんと子どもの像、このお母さんの像なんですが女性が肌をあらわにして非常に問題であると。セネガルは95%イスラムの国ですから、宗教指導者は「これはけしからん」と言ったんですが、やはり私の同じ部屋に居たセネガル人の同僚の女性が「いや、あんなこと言ったって、アフリカというか、セネガルのアフリカの文化は女性は裸が美しいとサンゴール、一番最初のセネガルの大統領は言った」と。だから、イスラムとか、キリスト教といっても、やはりアフリカはアフリカの表れ方というのがあるな、そういったところで、今後もアフリカは文化というのをつくっていくんだろうなというふうに思っています。以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

山田 林先生、どうもありがとうございました。

(第1部/了)